多種多様な文化を読み解く
ドイツ語圏文化学

「ドイツ語圏文化学」で学ぶとはどういうことでしょうか。それはその名が示す通り、ドイツ語圏、すなわちドイツ語が主に公用語である地域を対象とし、文化学、すなわちその地域の“文化”について勉強する、つまり、ドイツ語圏に見られる様々な文化現象を通して、そこに生きる人々や社会を知るということです。ここでは、ドイツ語の歴史を紐解いたり、英雄叙事詩『ニーベルンゲンの歌』の中に中世の世界観を感じたり、ディズニー映画になったシンデレラや白雪姫を『グリム童話』の中に探したり、あるいはこのような物語を元に作られた映画や演劇、ミュージカルを鑑賞とは違う視点から見てみたり、その他、音楽やデザイン、ファッション、広告、食文化など、題材はたくさんあります。総合的な分析の可能性の一例として、19世紀末に刊行された『ユーゲント』という雑誌を紹介しましょう。この雑誌にはイラストがふんだんに用いられ、そこに多用された曲線や生命力あふれる植物の描写は見るものをワクワクさせます。ここから「ユーゲントシュティール」という言葉が生まれました。この雑誌には、文芸作品・写真・風刺画、音楽（楽譜）・広告など多種多様な“文化”が凝縮されており、それを読み解くことによって、その当時の様子が生き生きと蘇ってきます。例えばこの雑誌の1896年7月18日号の表紙を見てください（下図）。あなたはそこに何を読み取りますか？

「ドイツ語圏文化学」の研究対象の範囲は広く、そして文化を読み解くために必要な理論や方法論も多岐に渡ります。「ドイツ語圏文化学」はちょっと欲張りな分野です。そんなドイツ語圏の文化への扉をぜひ開けてみてください！

古田香織　准教授

『ユーゲント』1896年7月18日号表紙 https://digi.ub.uni-heidelberg.de

複数のポストコロナと公共性を想像する
文化動態学

いつの間にか、私たちはポストコロナの時代に入っていると言われるようになりました。コロナの後という意味でポストが使われていますが、世界的に見て、それぞれの地域や社会に各自のポストコロナ状況を持っているわけです。

今年半ばから、出入国制限や外出制限、マスクの着用に関する政策が次第に緩和されていく傾向がかなりの地域に見られました。先月、日本では外国人観光客の入国制限が大幅に緩和され、たくさんの観光客が殺到しているとニュースで見ました。その中で面白い話もありました。A地域からのある観光客が日本の町を歩いて、周りの人が皆マスクをつけていることに違和感を覚え、「前の時代への逆戻り」「今、A地域でこんなことしたら怪しまれるだろう」と。時間的・空間的にはわたしたちは同じ時代を生きていますが、どのような社会をつくっていくかについては考え方が異なるのだと思いました。

社会学では公共性という用語があり、物事の「広く一般的に人々や社会に開かれている」性質を表す言葉です。異なる立場の人びとが共に生きやすい社会を作るには、自らの利害だけでなく、互いの利害を考え、譲り合うことが求められます。そこでの原理は必ずしも多数決ではなく、社会的なマイノリティを優先した公共性も考えられます。

コロナ感染後の重症化率が高齢者において特に高く、体質が弱い人や持病を持つ人の場合は後遺症を抱えやすいとみられています。人数的に少数ではありますが、社会の一部をなすこうした人々を確実に包括した公共性を作るためには、どのようなコロナ政策が必要でしょうか。外出や集会の自由は大事だと思いますが、今すぐにそれを実現させれば、結局一部の人たちの自由を犠牲にすることになります。マスクをつけ、少し息が苦しくなって嫌な思いをするかもしれませんが、それによって、コロナ感染で命の脅威を感じる人たちがそとへより安心に出られることが可能になります。多様な人を考えた公共性を作り、すべての人の利益を調整した社会が近代社会の理念であります。社会学は、各地域や社会の公共性の原理を見て取り、その変容を描き出すことを好みます。それから、公共性から落ちこぼれた人々を掬い上げ、社会的な少数者の声に耳を傾けることであらたな公共空間の構築を目指していると思います。

劉亜銘　博士後期課程1年

感染拡大防止対策としてスーパーのレジで設置されたビニールカーテン。すでに一部のスーパーで消えたようだ。
（出典：宮崎日日新聞「県内スーパーなど感染予防策あの手この手」2020年4月15日 https://www.the-miyanichi.co.jp/kennai/_44533.html）

両面を見る
英米文学

私の所属する英米文学研究室で主に扱われている分野の一つがヴィクトリア朝文学です。これを語る上で欠かせないトピックの中に「鉄道」があります。1830年代の交通革命の影響ですね。これがとっても面白いのです。

ヴィクトリア朝の時代、即ち主に19世紀のイギリスに住む人々の文化や、彼らが何を思って暮らしていたのかを知る手がかりです。現代の私たちにとってのスマートフォンと同様に、鉄道は単に便利さをもたらしただけではなく、当時の人々が様々なことを考えるきっかけにもなりました。その「当時の人々」の中にはもちろん、不朽の名作を書いた名だたる作家たちもいたわけです。

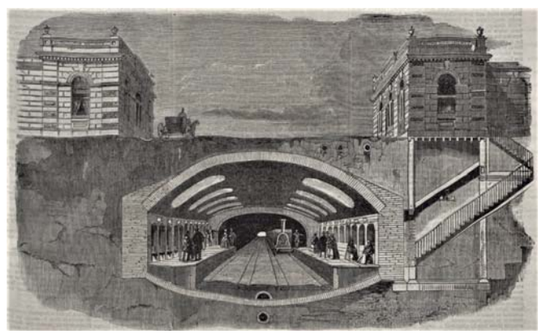
コナン・ドイルは、ロンドンと地方を結ぶ鉄道の力を借りてイギリスをまたにかけるシャーロック・ホームズの活躍を描き、ルイス・キャロルは地下鉄の開発で地下世界に興味を抱いた人々を『不思議の国のアリス』で魅了しました。一方で、この鉄道を危険視した作家もいました。トマス・ハーディは、この通信網が国を一つにすることによって地方色あふれるブリテン島の素晴らしさが失われることを危惧しました。彼は「改革」や「進歩」の良い面だけでなく同時に悪い面も鋭敏に捉え、その疑念を作品に表しました。

人間の歴史上、ものごとの前進にはとかく悪い側面がつきまとうものです。科学は爆弾、ネットはウイルス、SNSはレスバトル。我々も進歩を当然のものとするのではなく、両面をきちんと見抜くことが肝要だと思います。温故知新とはよく言ったもので、文学を丁寧に読むことでこうした様々な視点が得られます。そして視点が多ければ多いほど人は優しくなれます。

皆さんもぜひ、たくさんの古典や名作に親しんでみて下さい。

徳永暁　学士課程3年

地下鉄開通時のベイカー・ストリート駅風景（1863年）
Newspaper image (c) The British Library Board. All rights reserved.



月刊
名大文学部
第130号
隔月刊行

編集発行：
名古屋大学文学部広報体制委員会
koho@hum.nagoya-u.ac.jp
寄稿者の所属と学年は寄稿時点のものです。
2022年11月10日発行